

一仏両祖の教えを今に伝える

平成11年12月24日第三種郵便物認可(毎年1.3.6.9月の1日発行)令和1年6月1日発行 第149号

曹洞禅グラフィック

SŌTŌZEN GRAPHICS

2019 夏号 No.149



特集

昔からの伝統を
しっかりと
守り続けることが
大切です

大本山總持寺後堂 前川睦生老師

聞き手 藤木隆宣

いま求められている 視点は何か

今日の子育てにとって重要なのは、子どもの自治と自律性が尊重された「子どもの領分」の復権にあることを、前回指摘しました。大人に保護され、教育され、上手に遊んでもらう「居場所（居させられ場所）」ではなく、子どもたち自身が自分たちで取り仕切っている自律的な世界、お互いの行動を律する決まりや掟をつくり、それを守り合い、大人社会にも対抗する子どものテリトリーです。そこには、子どもたちが大人に育てられるだけではない独自の自己教育力があるからです。とは言っても、子どもたちは決して「清く、正しく、美しく」育つわけではありません。少し気を緩めると、とんでもないワルサやイタズラをしかねない存在ですから、羽目はずさないように地域社会の大人たちが目配りし、いさめる共同のまなざしが不可欠になります。それらは「子どもとおとなの緊張関係の構築」といえるでしょう。

「最後のガキ大将」 時代の教訓

「陣地近くの墓場で、チャンチャンバラバラやっつけていても、側を通る大人は『また、やっちよる』くらいに見てくれた。悪童は悪童で限度をわきまえ、田植えのすんだばかりの田

んぼを荒らすことは、理由のいかんを問わず、絶対のタブーだった。子供が限度をわきまえることを覚え、大人は子供の領分を侵さない。そんな信頼関係の上で、悪童たちは自由闊達、自由奔放にあそびまわることができたのである」（はらたいら『最後のガキ大将』フレールベル館、1986年5月）というように、かつては、子ども社会と大人社会との（緊張関係）のリアリティーの上に、子どもの領分・子ども社会の教育力が存在していたのです。

はらが少年時代を過ごした当時とは、地域社会の自然環境も人間関係も大きく変わってしまった現在ですが、しかしそこには子育て環境づくりへの重要な視点と教訓が秘められていると思うのです。

子どもと大人の 〈緊張関係〉とは

「子どもの居場所」をつくることよって、大人が環境を整え、安全に、上手に子どもを遊ばせ楽しむことはできるでしょう。しかし、それだけでは、子どもたちに野性味溢れる活力は生まれません。本当に面白い子どもの遊びは、大人の手のひらから飛び出し、冒険と挑戦のできるスリルに

挿絵 / 長谷川葉月



失われているのは 〈子どもと おとなの 緊張関係〉

早稲田大学名誉教授
増山均

ましまひとし
教育学・社会福祉学者。
1948年栃木県生まれ。
日本福祉大学社会福祉学
部教授、早稲田大学文学
学術院教授を経て、早稲
田大学名誉教授。『アニ
マシオンと日本の子育て
教育』文化『子育て支
援のフィロソフィア』な
ど多数の著書がある。

満ちた空間、巧みに駆け引きをしながら大人社会にも対抗できる自分たちの領分をかちとることにあるのではないだろうか。

今日求められているのは、子どもの領分を侵さずに、見守り、ときには見て見ぬふりをしつつ、つねに緊張関係をもって子どもたちと関われる大人社会の側のまなざしの構築にあると思うのです。

昔からの伝統を しっかりと守り続ける ことが大切です

大本山總持寺後堂

前川睦生老師



まえかわ ぼくしょう

聞き手

藤木隆宣

愛知県東泉寺住職。平成10年・平成23年からの二度にわたり大本山總持寺にて維那。現在は後堂として坐禅と法式の指導にあたる。平成23年にはドイツ3ヵ所にて曹洞宗初となる声明の海外公演を行う。

地元で続く迎え火と送り火

藤木 今年もお盆の季節が近づいてまいりました。九月にはお彼岸もございます。この時期、お寺やお墓にお参りしたり、お家にお坊さんを迎える機会もあるかと存じます。読者の皆さまにとっての心がけとして大切なことがございまして、お聞かせください。

前川 私がまず申し上げたいのは、儀礼や伝統の重要性です。昔からのものが、大変に永い時間を経て、いまこの時に繋がっている、この大切さを認識していただいて、故人を偲ぶという事です。

藤木 お盆の場合ですと、大体のお寺では施食会をされます。

前川 そうですね。施食、つまり食を施すわけですから、それは自分に向けてのことはありません。施食会では、ご本尊をお祀りする須弥壇の他に、施食会の壇を設けるご寺院も多いと思います。その壇の一番高いところにお祀りするのには、「三界萬霊」と書かれたお位牌です。分かりやすく申しますと、あらゆる「いのち」のための供養を行

うのが施食なのです。

基本は生飯です。生飯を取ると申します。これは仏教国ですと、例えばチベットの人たちでも、お酒を入れてもらったら、先ずぱっと少しこぼすのです。

藤木 それが生飯なのです。

前川 はい、そのとおりです。自分が全部は取らない、少し抑制するということの表れとして、そういうことをされているのだと思います。仏教の世界には、そういった考え方がいっしょに続いています。食物であれば、それをあらかじめ少し取っておく、あるいはお供えする、こうして営むのが、私は施食だと思っております。

それとお盆には、ご自宅に精霊をお迎えします。私の自坊のある地域では、今でも盛んにやります。松明を焚いて精霊を、お墓から連れて帰ります。

藤木 いわゆる迎え火ですね。

前川 はい。各家庭で迎え火だけでなく、送り火も焚きまします。昔に比べたら少々廃れましたけれども、それでもやっています。これは、精霊を迎えて祭るのです。祭って、そこへご飯を三度三度供えて、そして精霊と一緒に過ごすという時間を持ちます。これはとてもいいものであると思っ



愛知県三河地方に伝わるお盆の伝統行事「はねこみ」



初盆を迎える家庭をまわり、供養を行う

ています。松明用の木は山に取りに行く方もいますが、売られてもいるのですよ。松明を柴のようにして、結んであつて。それを幾つも持つて。初盆の場合は百八の松明を持ってきて、それを地域の人にお墓や河原で焚いてもらうのです。さらには盆踊りも行われますが、それは初盆供養として、初盆の各家庭をおとずれ一連の儀礼が行われます。「はねこみ」と呼ばれています。

藤木 それはすごいですね。そして精霊を連れて帰るんですね。

前川 一遍連れてこられたらお家に来ているのだから、もうお墓にいらつしやらないということではないのです。何遍も焚きに行きます。お墓に行くたびに焚いて、そしてまた連れて帰

昨今の傾向について

前川 昨今の傾向として、葬儀ですとかお墓参りといった大切な儀礼を、簡略化するくらいがあると感じています。僧侶の中にすらその傾向が広まりつつあると思っています。私はそれは全く違うと思っています。ある程度は略してもいいのですよ。今の時代に合わせてね。けれども、きちんと行うことの方がはるかに意義が大きいと思います。葬儀や死者儀礼をしない民族はどこにもいません。日本では主に仏教がそれを担ってきました。人間的な個人的な価値を超える価値を具体的な行為として示すことができるからです。死も当然個人を超えています。だからといって仏教が、死に関わるものとして悪者に扱われる必要は何もありません。葬儀は営まなければいけないのです。

大切な儀礼をきちんと行なっていく、そのことが何百年も行われてきた意義を発揮して、人々に働きかけると思いますね。そういう点をお坊さんは再認識すべきなのです。現代社会だからこそあらためて訴えることができると思います。

藤木 そうですね。そういう面では、お導師をしておられるご住職の進退がしっかりされているというのが、一つの訴え方になるでしょう。

るということをしましてね。これを「たいともし」と呼んでいます。たいまつともし。黒い煙がもうもうと上がります。それが「よりしろ」で、この儀礼によって霊の実現を図るということ。人間にわかりやすくする。そういうことによつて亡くなった方の霊をお連れして、そして祭る、いらつしやるようにお供えして、また煙を炊いて送る。これを昔から行なっています。

大量の松明を準備して焚くというのは、習慣のない方から見ると面倒に映るでしょう。もっと簡単にとお感じになられる方もいらつしやるかもしれません。しかし、この昔から続いていることを守ることが、私達と精霊とのお付き合いの実現なのです。

前川 はい。まずはきちんとしていること。

それからやはり両班もいかげんな所作をしないことです。きちんとすれば、それはそれで非常に良い時間になります。私の地元は愛知県の三河なのですが、まだいくばくかそういう見方が残っています。近所では昔から盆踊りのときに、お念仏から始まるような地域ですから、住民の方々はきちんと聞く耳をお持ちなのです。

藤木 伝統的にもそういうことが、しっかりと受け継がれている地域性をお持ちなのですね。**前川** そういう方たちは和尚さんの声を聞いてくれます。法要に臨まれる姿勢もしっかりしています。今度の若い方丈はいい声をしているねですとか、そういう評価をされます。

ですから儀礼というのは、いろいろな意味で重要な機能だと思えます。ただ、残念なことにごの問題は仏教界ではあまり議論されていないですね、いまだに。

藤木 進退をどう檀信徒に伝えていくかというところ、そこでお経を読むことによつて、理解できなかったことが知識としても入ってくる、身心一如の世界に少しずつもっていくというようになことは、曹洞宗でも当たり前として議論するべきだと思います。

前川 そうですね。ただ、宗内ですとか仏教界から目を転じて、全体というところで考えてみると、教育という問題もありまして。公立の学

校では宗教を教育してはいけないことになって
いるでしょう。それも大問題なんです。日本人
はどういう宗教性を持っているのかという問題
を、よく知ることができないということがある
のです。土台を理解できていないところに、昔
からの儀礼の重要性を声高に訴えようとしても、
なかなか難しいものがあります。

ここは重要だと思うのですが、要は、釈尊が
仏教をお始めになる以前の社会があります。釈
尊もやはりその社会に住んでいた方です。仏教
が中国に伝わっても、中国にはもともと以前から
の長い歴史が横たわっていますから、仏教はそ
の上に載っていることになりました。

日本に伝来してもそれは変わりません。ずつ
と永い間、日本人なりの宗教観を持っていて、
そこに仏教が載っています。そして東アジアに
おいて仏教というのは既存の宗教性や宗教観と
は矛盾しませんでした。中国で受容され、日本
でも受容されました。受容されて既存の宗教と
も習合(文化的な接触による混在、あるいは共存)す
ることで、新たな仏教の形を育てました。伝来
の前の宗教のエッセンスを残しながら。ここに
儀礼の問題があると私は考えています。

儀礼というのは、日本の『万葉集』の初期の
時代に行われていたものと、中国の三千年ぐら
い前に行われていたものを、時間を超えて比較
できるらしいのです。同じような営みがあると
いうことを分析した哲学者がいます。要はそう

ぶ存在も全体のためには欠かせないのです。

お寺に参拝にいらっしゃる方も、おそらくは
その全体を味わいに来られるのではないでしょ
うか。決して部分だけを視界に入れてはいるわけ
ではないと思います。しかし、その全体の空気
を醸し出す重要な要素として、細部もしっかり
していかないとはいけません。そういうことを仏
教者はよく知った上で営んでいくべきであると
思います。大相撲の呼出は、箒で土俵の砂を掃
くときにも、きちんとした格好で出てきますで
しょう。あれは一般の服装などではいけない
のです。もちろん行司もそうです。きちんと
装束を調べて、軍配を執る。土俵下の審判も紋
付き袴姿です。ああいうことを細部まで徹底す
ることによって保存されている社会があるわけ
です。

実はお寺もそうなのです。仏教を基盤とした
思想や社会観を内包していて、しかも具体的に
保存してきた歴史があります。あらためてそこ
に意義を復活させるべきだと、私は思っていま
す。

藤木 昨今、「寺離れ」というようなことが言
われて久しいですね。世代が交代していく中で、
お寺との関わりは世代間で繋がらずにきていま
す。昔は、僧侶は「お寺さま」と呼ばれたりし
て非常に大事な存在として、檀信徒の意識の中
に入っていたと思います。ところが世代の交代
とともに少しずつ薄れていきます。戦後教育の影

した儀礼の伝統を持っていて、その上で仏道を
営んでいるということがあります。私達の儀礼
の中には、前の時代の儀礼が閉じ込められてい
るのですね。例えば七下鐘導師上殿というの
は只管打坐とどんな関係があるのかというわけ
です。私たちは現在形でさらに前の時代のもの
を維持してもいることになりました。

昔からファンの多い大相撲の世界もそうです
ね。私は一度だけある研修会で行ったことがご
ざいます。実際に行ってみて感じたことは、相
撲というのは、力士が土俵上でぶつかり合った
り組み合ったりするだけではないということだ
す。呼出がカンカンと拍子木を鳴らす、箒で土
俵を掃く、懸賞旗を持って土俵の周りを練り
歩く、一糸乱れぬ所作が満載です。行司の立ち
居振る舞いも美しい。あれは単なるレフェリー
ではありません。神事を司る、まさに行司です
ね。そして力士が勝負を行う、そこにも所作が
ある。観客は、相撲という儀礼の全体を楽しん
でいらつしゃると実感しました。

藤木 なるほど。テレビの画面では判りにくい、
「ハレ」(非日常)の場の空気ですね。

前川 空間全体です。あの空間の中に、伝統
が詰まっていて、躍動しているのですね。それ
が人々を惹きつけている。勝負だけではなくて、
全体を味わいに行くのだと思います。大相撲の
場所に足を運んで観戦するのは、全体を味わい
たい方々で、そのファンの方たちの、快哉を叫

響も出ているのかもしれませんが、僧侶も魅力
ある寺づくりのためにしっかりとしなければいけ
ません。

今ご老師がおっしゃったようなことをしっか
り守ると同時に、お寺が社会と連繋して、魅力
ある寺づくりを真剣に考えていく段階にきてい
ますね。

仏事を大切に いとなむことの意義

藤木 私が師匠から寺を受け継いで住職にな
ったのが平成二年です。当時、自坊のある福井
県越前町ではご自宅で葬儀を営んでいました。
都会でも、自宅や自宅に近い公民館などでお葬
式をして、近所の方たちがお焼香に来られてと
いうような慣習がありました。

それがわずかの間に随分と変化しまして。今
は東京などではお葬式の会場は、いわゆる火葬
場に近いところから埋まっていくということだ
す。しかし、両親や身近な人の死というものに
ついては、何らかの形できちんと見送りたいと
いう素直なお気持ち、一般の方々にはおあり
になると思いますし、そこは真摯に向き合っ
ていくことが、一番大事だと思います。

前川 本当にそのとおりだと思います。總持
寺のお檀家さんでは、非常に丁寧に仏事を営ま
れます。

例えば告別というのは、これも非常に昔から

の伝統です。東アジアにおける宗教性らしいのですが、壇の上に祭ったら、それが存在すると見なすのです。「いますごとく」祭る。そして、そこであらためて別れを告げるのです。私はお通夜の席の説教で、あらためてしっかりと行う儀礼を営まないと、お別れはできませんといつも申し上げています。

同時に、私たちは単に一人で生きていくのではないのですから、例えば連れ合いの方を亡くしたり、お子さんを若くして亡くしたりした方が、通り一遍の葬儀を営んで済むのかといつも思います。人間の精神生活はそのようにはいかないと思うのです。ですからお坊さんは、きちんとそこを理解して寄り添うべきだと考えます。

藤木 お葬式があつて、四十九日があつて、一周忌、三回忌ときますけれども、その間の中で今ご老師も触れておられたように、身近な方を亡くした時に自分の気持ちの振れがどうなっていくのか、不安も多いのです。そういうような時のフォローをどうしていくのか、既成仏教界の中での意識が薄いような気がします。そこ坊さんがその気にならなければ進んでいかなない話なので、それができればと思います。

前川 仏教では昔から、根本的には亡くなった人間と生きている人間は繋がっているということなのです。ところがヨーロッパの思想はそういうものね。

今回總持寺様を拝見させていただいて、いまは大変立派なご本山も、百年前は原野からの開拓であつたと存じます。今この大伽藍を見て、御移東されたということの意義は、計り知れない大きさがありますね。

前川 計り知れないですよ。たくさんこのことを評価すべきだと思います。さきほど、保育園のお子さんたちが遊びに来ていましたでしょう。

藤木 拝見しました。いい空間ですね。

前川 佛殿の前で遊んでいる、あの体験を心

うではありませんでした。生と死は分断されていて切れている。主観と客観、主体と客体があるから、生きている者と死んでいる者は分かれているというふうに言おうとして、それで終わってしまったのが西洋の科学なのです。しかし現在、主観と客観は分けられないということになっていきます。死者と生者はどこかでつながっているのです。

藤木 「つながっている」という考えは、仏教者にとつてとても大事なことです。「いのち」としてつながっている。日本人にとつてもしつくりくるのではないのでしょうか。

前川 客体がないということは、やっぱり繋がっているわけです。それは今の私たちからすれば、そこにいらつしやるということなのです。私はそういうように言っています。

總持寺では朝の読経で大悲真読という独特のお経の読み方をします。真読は、峨山禪師を待っている読経とされていますが、それは解説であつて、実はその時、峨山禪師がいらつしやるのだというのが真読の意義だと思えます。

真読によつて、いらつしやることを証明しているというのが、この宗教的儀礼の意義だと思えます。そういう点で、私たちの儀礼を行う中に死者も存在するし、あらためてそれに取り組む。これが私たちの儀礼であり、修行のひとつだと思ふのです。私はいつもこのことは大衆(修行の僧侶)に話しています。

に刻むことができるのです。保育的にも伝統的に素養を養成する観点からも、なにより仏さまと一緒にいる、あんなに幸せなことではないでしょう。

藤木 總持寺様の空気を吸つて、小さい時に總持寺というお寺に行つていたよねというようなことは、お子さんたちが大きくなってからも、必ず話題になるのではないのでしょうか。今日は本当に貴重なお時間を頂戴しまして、ありがとうございました。



仏殿前の広場を散歩する保育園の園児たち

大本山總持寺前川睦生後堂老師の声明公演を取録したDVDを5名の方にプレゼントいたします。仏教企画(下欄の送り先)まで、お名前・ご住所・電話番号・プレゼント名を明記のうえハガキでご応募ください。2019年8月末必着



曹洞禅グラフ147号(冬号)プレゼント『般若院英泉の思想と行動』は次の方が当選されました。

群馬県/安西裕子様

身近な人との心温まるふれあいや本誌への感想、仏教についての質問などを600字以内でお寄せください。Eメールでも受け付けております。

送り先.....
〒252-0113
神奈川県相模原市緑区谷ヶ原2-9-5-5
仏教企画編集部
Eメールアドレス.....
fujiki@water.ocn.ne.jp

読者からのお便り 静岡県 海老岡道子様

『曹洞禅グラフ』146秋号では、丸山劫外先生の「仏遺教経解説」10を興味深く拝読しました。普段の生活に於いて、いかに「分かったつもり」でいることが多くあるのかという気が致しました。これからも繰り返して読みたい解説です。

次世代へのバトンを渡す課題を 背負うのが私たちなのです

聞き手 藤木隆宣



鬼生田俊英宗務総長

寺離れを防ぐには、お寺の開放を

藤木 総長老師のご自坊でのごことからお話をお伺いします。

鬼生田 私はきょうだいが多くて、上のほうは姉ばかりで四人、妹が二人に弟が一人おります。非常に貧しい生活でした。しかしこの経験が人生に生きていると思っています。あの当時の貧しかった生活というのは、今の私にとって宝です。

自坊のことを申しますと、本当に古い寺だったのですが、五十年かけて全部造り直しました。今、檀家の方が仏事を行うのは、百パーセントお寺です。

藤木 そうですか。それはいい習慣になっておられますね。

鬼生田 これをやらないと、お寺が駄目になってしまふと思うのです。これは、お寺も非常に骨を折ります。檀信徒の方は枕経やお通夜から

藤木 なるほど。

葬儀に際しても、いろいろなことを分かち合っていて、話し合う。枕経が終わってからでも、あなた方、今後どうされるの、どういうふうこれから家庭を守っていられるの、といったいろいろなお話ができます。そうすると親密度が違うのです。朝起きて、本堂へ行って帰ってきて、皆さん、おはようと挨拶して、お茶を飲みなさいよと言って、一緒にお茶を飲む。これで違うんですね。

お寺も一緒に檀家の方と最後のお弔いをして、「お寺から送りだす」、これが私は大事だと思っております。

藤木 ご自坊の福島県郡山市では、そういった習慣があまりになつたのですか。

藤木

全くそのとおりだと思いますね。生老病死の生死というのは一番大事なところでございます。ぜひ、全国のお寺様のモデルケースになつて戴けたらと思います。

次世代に向けての様々な整備を

藤木

宗務総長としての活動、曹洞宗のあり方への考察などについてお聞かせください。

鬼生田

一つは、宗制についてです。今の宗制が決して悪いわけではありません。しかし、次の世代にどうバトンを渡していくか、という課題を背負っているのが私たちの現在でございます。そのためには、急変する時代に追いついていく、あるいはそれに負けないきちんとした制度をつくって、足元を固めておくということです。

藤木

具体的には何かございますか。

鬼生田

包括法人の中には三権分立がちゃんと認められています。ですから、議会があつて、行政があつて、そして審事院があるのですが、この三権分立が今の宗制の中だけではパーフェクトとは言えないのです。そこからはみ出たしまつて、裁判所が舞台になったりもします。今、裁判が実に多くなっているようです。

藤木

三権分立がきちんと構築されていないからではないかと思えます。一つ一つの事案が司法の手を煩わさなければ解決できないというの



鬼生田宗務総長のご自坊、広度寺本堂で行われるご法事

鬼生田

なかつたのです。むしろないからできると思ひました。定着するのには二十年かかりましたが、その後、みなさんが口コミで宣伝してくれます。こちらからの宣伝はやりません。私のところの親戚の仏事をお寺でやったけど良かったよ、あなたのところもやられたら、となってくるんですね。お寺というのはそういう存在ではないでしょうか。寺離れが起きないようにはお寺も、檀信徒の方たちに開放する努力をしないといけないと考えます。

与 仏 有 因
与 仏 有 縁
仏 法 僧 縁
常 衆 我 浄

毎日書道
高橋秀榮

作品集
募

ご家族のみなさまの応募をお待ちしております

お手本を参考にして、作品を半紙（横向、お名前は左側）に書いてご応募ください。（無料）
ご応募の中から優秀な作品を選び、年に1度誌上で発表し、記念品を贈呈します。
住所、氏名、電話番号を明記して作品をどしどしお寄せください。
145号～148号（前号）の応募作品の審査発表は、151号（2020年冬・新年号）にて、
149号（今号）～152号の応募作品の審査発表は、155号（2021年冬・新年号）にて行います。

送り先 〒252-0113 神奈川県相模原市緑区谷ヶ原2-9-5-5
仏教企画 ☎042-703-8641

締切 2019年8月末

与 仏 有 因
与 仏 有 縁
仏 法 僧 縁
常 衆 我 浄

今回は『延命十句観音経』という經典の中から四句十六字を選んでお手本にしました。経文は短いですが、仏法僧との縁をもつならば、仏の世界が実感できると説かれています。観音菩薩の慈悲を想い、書き写してみてください。



成田隆真 人事部長

であれば、包括法人の存在意義そのものへの疑問も出てまいります。やはり宗制をきちんとしておくことは、第一の眼目です。

藤木 そういう意味では、どういう方が配置され、正しく見ていかれるかといった課題もありませんか？

成田 今良い例として、僧籍があり、なおかつ弁護士としての活動をされてる元大学教授の方に、審事院の委員をお願いしています。これは画期的なこと、初めてのケースだと思います。

藤木 それはとてもいいですね。おそらく初めてですね。

成田 また同じようなケースで、宗制改革の拠点の中にも、同じ曹洞宗の宗侶で、若き弁護士がいます。同じ立脚点を持ちながらも、多角的な物の見方ができる方に応援を願うと、そういうことをこれから始めたいと思っています。また今は、宗侶一人一人の存在意義が鋭く問われている時代ですから、曹洞宗の宗侶として何ができるかということを真摯に向き合っていく、或いは若手がそういうメッセージを発信する機会を増やしていくことが大切だと考えます。

鬼生田

もう一つは、過疎地に対する寺院のあり方を

成田 今後の施策に生かすためにもしっかりと意見を伺ってまいります。

藤木

ぜひ、多くのお声を反映して戴き、次の世代が希望を持てる曹洞宗をお築き戴ければと思います。本日は貴重なお時間を戴き、ありがとうございました。



福島県郡山市 鬼生山広度寺

作法で導く心の調え方

藤井隆英

「痴」とは

今回は、煩惱三要素の最後「痴」の説明をいたします。「痴」とは、物事の本質を知ろうとしない心です。仏教は「法」という物事の理（ことわり）を示した教えです。仏法の本質は「縁」です。「縁」とは常に繋がりが続いているという意味です。「縁」を知るとは、全ての物事と繋がっている「自分」という存在を、ありのまま的確に捉え続けるということなのです。

仏教に「十八界」という教えがあります。これは、感受できる全ての物事である「六境」（色声香味触法）、自らの感覚組織である「六根」（眼耳鼻舌身意）、知覚された認識世界である「六識」（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識）が合わさり、物事をとらえる範囲は「六境」→「六根」→「六識」の順に小さくなっていくというものです。教えに沿うと、

全ての物事をありのままに感受し続けるのは不可能なこととなります。

「身体知」という言葉があります。これは「身体に根ざした知」です。具体的には身体を動かす経験、または身体感覚の深い認知によって身につけられた知恵です。「十八界」に照らし合わせる「六識」が「身体知」です。

「身体知」は、全ての物事に対し分別意識を持たず同様の尊意を持ち、感覚を研ぎ澄ませ、瞬間瞬間の状態を深く感受し続けることにより高まります。「身体知」向上は「六識」拡大となります。それは本質のありのままを知っていくことです。

今回は「手を慈しむ瞑想」で「身体知」を向上させ、「痴」から離れ「縁」を見据え「法」に沿った真の幸福感を築く方法をお伝えいたします。

左 手の平を上に向けて固定します。次に左手の平中心部に右手指先をそっと触れさせます。そして右手指先にて左手の平をまんべんなく丁寧になでていきます。通常なでるという動作は、なでる側に感覚の重きをおきますが、この場合なでられる左手の平の感覚に重きをおきます。右手指先は左手の平の皮膚感覚や、なでることにより沸き出る感情や想い・思考を素直に受け取り続けて下さい。



上 向きの左手の平を下に向け直します。次に左手の甲の中心部に右手指先をそっと触れさせます。そして右手指先にて手の甲を丁寧になでていきます。重きをおく感覚は①と同様です。左手甲の心地よい部分を続け導かれるように右手指先を動かして下さい。すると総合的な身体知が高まり、本質の自己肯定感が築かれてきます。①②が終わりましたら右手と左手の役割を反対に行います。



手 の甲同士をすり合わせます。左右の手どちらかに重きをおくのではなく、どのようにすり合わせたら心地よいかを丁寧に探り続けます。すると意識が「心地よさ」を作っている「我」状態から「心地よい」に委ねられた「無我」状態へと変化していきます。それがすなわち「痴」から離れた真の幸福感の導きとなるのです。手の甲が終わりましたら手の平でも行い終了します。



仏遺教経解説

最終回

丸山劫外

まるやま・こうがい
昭和21年群馬県生。早稲田大学卒業。駒澤大学大学院博士課程満期退学。昭和57年得度（浅田大泉老師）。同年立職（浅田泰徳老師）。平成元年嗣法（余語翠巖老師）。現在所沢市吉祥院住職。曹洞宗総合研究センター特別研究員。

仏遺教経（仏垂般涅槃略説教誡経）

姚秦三蔵法師 鳩摩羅什 訳

解説

釈尊の入滅と不滅の教え

沙羅双樹のもとで、まさに涅槃に入られようとする寸前に、釈尊は、弟子たちに向かつて、最後の説法をしてくださっています。初転法輪で阿若憍陳如を救い、最後に須跋陀羅を救ってくださり、釈尊の身の回りの人たちは全て救い終わつたのです。

以後の人々も全て救うべき因縁を作つておいた、とおっしゃいます。それは、「如来の法身」が生き続けるからなのです。ご自分が説かれた教えではありますが、宇宙の真理そのものですから、永遠にこの世にあり続ける法なのであるとおっしゃっています。インドから中国、そして日本、さらに世界中に釈尊の教えは、現に生き続けています。人類がこの世に存在する限りは、不滅の教えでしょう。

原文訓読

当に度すべき者、若しは天上人間皆ことごとく已に度す。その未だ度せざる者も、皆亦已に得度の因縁を作す、自今以後我が諸の弟子、展転してこれを行せば、則ちこれ如来の法身常に在して滅せざるなり。

訳

（私が）救うべき者は、天上界も人間界の者も、すべて已に救つたのである。未だ救つていない者もみな已に必ず救われるという因縁を作つておいた。これから以後、私の弟子たちが、次々と、私の教えを広め、修行するならば、とりもなおさず、私の説いた法（如来の法身）は、常に生きていて、滅びることはないということなのだ。

原文訓読

是の故に当に知るべし。世は皆無常なり、会うものは必ず離ること有り。憂悩を懐くこと勿れ。世相是の如し。当に勤め精進して早く解脱を求め、智慧の明を以て諸の癡闇を滅すべし。

訳

このようなことなのだから、ぜひとも知るべきである。世の中のことは、すべて無常である、会うものには、必ず別れの時があるのだ。それを憂い悩むことをしてはならない。これがこの世の相（すがた）なのである。そうであるから、ぜひとも精進して早く悟りを求め、智慧の灯りで、諸々の愚かなる闇をなくすべきである。

解説

たとえ死による別れが世の相とはいえ、お子さんに先だたれることほど辛いことはないでしょう。これほど我が



インド クシナガラにて 写真提供：山田悠光

身（み）に涙（なみ）があつたかと、驚（おどろ）くほど涙（なみ）が乾（かわ）くこととはないほどと察（さ）します。また、父母（ふぼ）との別（わか）れもまことに寂（さび）しく悲（かな）しいものです。道元（だげん）禪師（ぜんじ）様（さま）は、八歳（はっさい）でお母（おはは）様（さま）を亡（な）くされ、幼（わか）くして無常（むじやう）を悟（さと）ら

れて出家（しん）なさっています。

二月十五日は、釈尊ご入滅の日とされています。二月には、釈尊の涅槃図（ねはんず）が、多くのお寺にかけられます。右脇（みぎわき）を下（した）になさり、横（よこ）になつて臥（ふ）せている釈尊（しやくそん）の周り（まわり）に、泣（な）き悲（かな）しんでいる多くの弟子（でし）たち（たち）や、動物（どうぶつ）たち（たち）が描（えが）かれています。八十歳（はちじゅうさい）の高齡（こうれい）になつても、布教（ふきやう）し続けてくださった釈尊（しやくそん）ですが、ついに最期（さいご）の時（とき）をお迎え（むかひ）です。この情景（けいけい）を思（おも）い浮（う）かべながら、釈尊（しやくそん）の言葉（ことば）に耳（みみ）を傾（かた）けましょう。

原文訓読

世は実に危脆（きぜい）なり、牢強（ろうきやう）なる者（もの）無し。我（われ）今（いま）滅（めつ）を得（え）ること悪病（あくびやう）を除（のぞ）くが如（ごと）し、此（こ）は是（これ）は、まさに捨（す）つべき罪惡（ざいあく）の物（もの）、仮（かり）に名（な）けて身（み）と為（な）す。老（ろう）病（びやう）生死（しんじ）の大海（だいかい）に没（もつ）在（ざい）す。何（なん）ぞ智者（ちしゃ）有（あ）つて之（これ）を除（のぞ）滅（めつ）することを得（え）ること、怨賊（おんぞく）を殺（ころ）すが如（ごと）く而（しか）も歡喜（かんぎ）せざらんや。

訳

世の中はまことに危うく脆いものである。（絶対的に剛健（こうけん）などという者（もの）はいない。私が今、入滅（にりめつ）ができることは、悪病（あくびやう）を取り除く（のぞ）くようなものである。これこそは、まさに捨てるべき罪（つみ）なもので、かりそめの身（み）というものなのだ。この身（み）は生老病死（しやうらうびじ）の大海（だいかい）原（はら）に浮（う）き沈（しづ）みしているような危ういものだ。そうであるから、智慧（ちゑ）ある者（もの）は、この身（み）を取り除く（のぞ）くことができ、喜（よろこ）ぶことがあろうか。

死を迎えることが、歓喜することであるとは、普通は思えないことです。「まさに捨つべき罪悪の物」それを「仮に名けて身と為す」とは。なんと大胆な表現ではありませんか。

釈尊はご自身の身が減びることを、悟りきつた境地からおっしゃり、仏弟子たちもたゆみない修行をすることによって、この身に執着しないようにと願っているのです。

原文訓読

汝等比丘、常に当に一心に勤めて出道を求むべし。一切世間動不動の法は、皆是敗壞不安の相なり。汝等しばらく止みね、また語いふことを得ること勿れ。時將に過ぎなんとす。我滅度せんとす。是我が最後の教誨する所なり。

訳

修行者たちよ。いつも一心に仏道修行に勤めて、迷いから抜け出る道を求めなさい。この世の現象のすべては、必ず壊れ安定のない相である。

修行者たちよ、ひととき泣くことをやめて静かにしなさい、これ以上なにか言うこともやめなさい。時は將に過ぎ去ろうとしているのである。私は入滅するのだよ。

す。

すでに入滅百年後には、仏教教団として大きな分裂があり、その後も多くの部派にわかれます。さらに部派のように阿羅漢になることを修行の最高の到達とし、阿含經のみを仏説とするだけでなく、あらたな經典も仏説とし、悟りを求めて修行する者を菩薩とする大乘仏教といわれる運動が起きたり、それこそ多数の枝葉に分かれて複雑に変容しています。ですから、仏教と一概に説明しきれないといっても過言ではありません。

さて、私たちは、先祖供養さえしていれば仏教と勘違いしていませんか。先祖供養し手を合わせるの、仏教ならずとも当り前のことといえます。

この『遺教』の教えを読み返したとき、はたして、先祖供養をせよ、と説かれていたでしょうか。それはどこにも見つけられません。釈尊が教えてくださっているのは、一人一人の生き方です。

複雑に変容している釈尊の教えですが、この經典に説かれている教えは本当に釈尊の教えとして根本と思ってください。

今まで説いてきたことが、私が最後にさとし教えるところである。

解説

釈尊の教えとはなにか

死なない人はいません。釈尊でさえ、お亡くなりになるのです。この世のあらゆる生きとし生けるものは、必ず死ぬのです。それが真理なのです。誰一人として、このルールから逃れることはできません。

ご入滅の地、クシナガラクシナガラの沙羅双樹のもと、釈尊はこの世での命の終わりを迎えています。しかし、そこに感傷の入る余地はありません。仏弟子たちよ、お前たちにも、この時は来るのだ、と教え、精進せよ、と、さとし、師としての親切心を尽くして、さあ、いよいよ「時將に過ぎなんとす。我滅度せんとす」と、別れを告げているのです。

しかし、ここで改めて考えてみてください。

釈尊の教え、仏教とは、いったいどのような教えなのでしょう。現在の日本だけ見てみても、たくさんの宗派があつて、それぞれいろいろな角度から仏教をとらえています。



写真提供：本田守 にて サールナート インド 地 初轉法輪の地

諦の道理を学ぶ」等等。

これらの教えを守って、仏弟子として生きる。私も今に生きる仏弟子として、釈尊の教えに従って生きようと思つたら、と、「生命の真剣勝負」をしている、という気持ちになります。

どこから頂いたか証明はできませんが、こうして生かされた不思議な我が生命、怠りなく「自度(自らのさと)りを求めよ」と説かれた釈尊の声に耳を傾け、今日一日も仏弟子として、精進したか、と自問します。

「微力ながら尽力して生きる」が私のモットーですが、尽力したか、と反省します。ただ、正直申しますと、仏の前に懺悔し、「至りませんでした」と、ほとんど毎日反省しています。

そして、いよいよ誰でも迎える最期のとき、願わくば、莞爾笑つて、サンキューそしてグッバイ、と、旅立ちたいものです。これで私の解説は終わりとさせていただきます。どうぞ、皆様の人生が、悔い少なきようにと祈っています。

長学寺 「先祖まつり」 を訪ねて

取材=小野崎裕宣



参詣者に挨拶をされる生沼善裕住職(右)



長学寺護持会長 金井喜之助さん



お台所を担当された皆さん



大般若転読法要

かつての城下町に
建つ古刹、長学寺

富岡市は群馬県の南西部に位置し、かつては「加賀百万石」で知られる加賀藩の支藩、七日市藩の城下町として栄え、明治期には「富岡製糸場」が創業されました。富岡製糸場は二〇一四年、ユネスコの世界遺産に登録されています。市街地から北に向かつて車で一〇分ほどの小高い山の上に、今回訪れた長学寺(生沼善裕住職)があります。平安時代初期の承和二(八三五)年の開山で、江戸期からは七日市藩主前田家の菩提寺として、地域の信仰を集めてきました。

毎年三月二十五日には、春の恒例行事、「先祖まつり」が開かれます。今回『曹洞禅グラフ』では、先祖まつりの取材を通じて、地域の皆さまの笑顔に触れてきました。

賑やかな笑い声に
包まれて

朝九時三〇分の開始を待ちわびるように、境内下の駐車場には早くからマイクロバスが到着し、たくさんのお参詣者が降り立ちます。賑やかなおまつりのスタートは、「相撲漫談」と落語からです。法要の前に、まずはみなさんで大笑い。取材日の前日に終わったばかりの大相撲春場所をネタにした漫談に笑い、美声が響く相撲甚句には、みなさんで合いの手を入れて楽しんでました。時事ネタと古典を織り交ぜた落語家の軽妙な話術には、オチが分かっていても笑ってしまいます。たっぷり一時間以上お笑いを堪能して、楽しい空気が冷めやらぬ中、住職を導師に、地域教区の僧侶が参集しての大般若転読法要と先祖供養法要が行われました。

の準備のために裏方のお檀家さんがフル稼働です。毎年二〇〇人分を用意されるこのことですが、その様子を拝見すると、作業を楽しむかのように、みなさんの笑顔がはじけています。テーブルには、おまつり名物の「五目御飯」がごんごんと並べられ、お腹がすいた参詣のみなさんの到着を待っています。この五目御飯、お米の弾力と旨さを引き出すために大きな釜を使って直火で炊きあげられおり、やさしく味付けされた逸品です。

「笑顔を繋ぐ」
おまつりの意義

最後のプログラム、「お楽しみ抽選会」を終わって、お話を伺いました。

現在のおまつりの形が整う以前は、「やしやんま」と言って、涅槃団子を配る行事が各地域で賑わいを見せていたそうです。東堂様のお話では、「やしやんま」

は「やしやんま」の転訛によるそうです。この「やしやんま」、長野県北部を中心に昔から伝わっており、お釈迦さまの涅槃会に戴くお菓子を意味します。

護持会長の金井喜之助さんのお話によると、この行事の日には学校も休みになり、現在のように娯楽が多くなかった頃のお子さんたちにとって、何よりの楽しみだったようです。寒くて長い冬をもう少しで越えようかという涅槃会の季節は、地域の大人の方にとっても、お子さんにとっても、笑い声が響き渡る季節だったのでしょうか。

現在は寒さに配慮して三月二十五日に行われている「先祖まつり」。ご先祖さまが生きた頃の「笑顔」を偲び、そして次の世代に向けても笑顔を繋いでいく、このおまつりが地域の中で息づいている意義を感じる一日となりました。



先祖まつり名物の「五目御飯」



楽しいお食事のひとつ



落語家の軽妙なお話に聴き入る



中食の準備に大忙し



相撲漫談に大きな笑い声も



おみやげをいただいて

心配しなさんな。
悩みはいつか消えるもの
板橋興宗著

秀和システム刊



定価：本体1,000円＋税
(最寄りの書店にて直接おもとめください)

失われているのは〈子どもとおとなの緊張関係〉 増山均 2

大本山總持寺後堂 前川睦生老師インタビュー 4

鬼生田俊英宗務総長・成田隆真人事部長インタビュー 12

毎日書道 高橋秀榮 15

作法で導く心の調え方④ 藤井隆英 16

仏遺教経解説 最終回 丸山劫外 18

群馬県富岡市長学寺 「先祖まつり」を訪ねて 22

表紙画／平川恒太